北日本新聞 2017.1.16 （第3種郵便物認可）

拠点探訪

南極 ユニオン・グレーシャー

# 「おもてなし」で心も温か

―下―

「想像以上に暖かい」。南極唯一の民間キャンプ、ユニオン・グレーシャーに着いて真っ先に思った感想だ。気温はマイナス9度だが、快晴で、風が吹いていない。加えて夏に当たるこの季節、南極は白夜で一日中、日が照っている。キャンプの看板前では、上半身裸で記念写真を撮るグループもいたほどだった。

キャンプに着いて施設の説明を受けている間に、ドーム型の客用テントには飛行機から自分の荷物が運び込まれていた。1張を2人で使う。中に入ると簡易ベッドの上に寝袋が用意してあった。日が沈まないため、中はビニールハウス状態。二重構造で熱を逃しにくく、室内の気温は15～21度ぐらい。寝袋に入ればほとんど寒さを感じない。

とはいえ、ここは南極。「ちょっと風が吹くだけで、いっぺんに寒くなるわよ」。キャンプのゲストサービスマネジャー、キャロライン・ベイリーさん(52)が指摘する。油断は禁物だ。

## 1週間待ちも

食堂テントをのぞくと、いろんな国の冒険者たちがテーブルで談笑していた。訪れた時に最も多かったのが、南極最高峰、ビンソン・マッシフ山（4893メートル）の山頂を目指す登山者たち。アメリカやエジプト、イギリスなどさまざまな国の人たちでグループを作り、アタックの準備をしていた。

チェコのパベル・ノバコワさん(57)、ダナさん(43)たち7人のグループは、スカイダイビングが目的だった。真っ白な大地に飛び降りるのがいいのだとか。ガイド役のオマール・アルジェランさん(50)は「南極行きの飛行機が天候の関係でなかなか飛ばず、1週間も待たされたよ」と笑顔を見せた。

キャンプは昼前になると、プロペラ機で登山のベースキャンプに向かうグループや、南極点を目指すグループがそれぞれ出発し、静かになる。スタッフもテントを清掃したりと新たな客の受け入れ準備で忙しくなる。

いざ、自分が滞在するとなると気になるのが、トイレや入浴だ。南極では「何も持ち込まない、残さない」が原則となる。当然、し尿も全て回収する。

裸で記念写真を撮る登山客ら。気温は氷点下でも風がなければ意外に寒さを感じない＝南極のユニオン・グレーシャー

食堂テントでくつろぐ各国の登山客ら

トイレでは、まず小を済ませて、別の便器で大をするのが基本ルール。混ざると大便を収めたビニール袋が凍った小便で破れてしまう。温水シャワーもあるが、一度に使える水の量は決まっている。「できれば2、3日に1回で」とキャンプスタッフ。もっとも、汗をかくことはなく、乾燥していることもあって、日本にいるときほど入浴の必要性は感じなかった。

ユニオン・グレーシャーのトイレ。「小を済ませてから大」がルールだ

## 野菜・果物ふんだん

### 記念ディナー

食事は、1日3食ビュッフェ形式で提供される。肉の煮込みや魚のグリルなど、日替わりメニューで、新鮮な野菜サラダや果物もふんだんに用意してある。朝食にご飯や焼きサーモンが出た日があった。インスタントのみそ汁もあり、「和定食」風に仕立てていただいた。どうも、シェフは客の顔ぶれを見てメニューを決めているようだ。劇団文芸座の南極公演では、わざわざ団員4人に記念ディナーを用意してくれた。並んだのは、おすしやおそば。「おもてなし」の心遣いは三つ星ホテルに負けていない。

ある日の食事。生野菜や果物もふんだんにそろえてある

食堂テントには、セルフサービスでお湯やコーヒー、紅茶、ホットチョコレートなどが24時間用意してある。キャンプ唯一の日本人スタッフ、宮﨑淑子さん(36)は「南極は空気が乾燥しているため、脱水症状を起こすこともあるので、なるべく多く水分を取ってください」とアドバイスしてくれた。

キャンプでの時刻はチリ時間で、日本との時差は12時間。ちょうど昼夜がひっくりかえる形になる。一日中太陽が昇っているとはいえ、深夜になるとさすがにキャンプは静かになる。空気が乾燥しているため、音が伝わりやすい。大きな声でのおしゃべりはマナー違反だ。寒さも静けさもやはり日本とは違うのだと実感しながら、寝袋に潜り込んだ。

（文化部長・寺田幹）

◇

「上」は14日に掲載しました。

**メモ**

南極ツアーは、半島クルーズを中心に年間3万人の観光客が訪れている。近年は「世界初」と冠したイベントが人気で、定番化したアイスマラソンは1年以上前から定員の50人が埋まる。ただ、行きやすくなったとはいえ、許可や申請も必要で費用も高い。極地のツアーを専門に扱うトライウエルインターナショナル（東京）の田島和江代表は「ディスカウント料金がしばしば出ることがあるので、インターネットなどでこまめにチェックしてください」と話している。